

〈특집 1: 물품과 지역성: 동유라시아의 진상과 증여〉

## アイヌの北方交易と蝦夷錦という中国製の絹織物\*

中村和之\*\*

### 〈목차〉

- I.はじめに
- II. アトゥイヤコタンから来た金の着物
- III. モンゴル帝国・元朝のサハリン島への進出とアイヌ
- IV. 明朝の北東アジア政策と清朝とロシアとの交渉
- V. おわりに

### [국문초록]

예조 니시키는 일본의 선주민족인 아이누의 조상이 북방 교역을 통하여 입수한 중국제 견직물의 총칭이다. 아이누의 북방교역 루트는 홋카이도에서 사할린섬 및 아무르강 하류 일대를 경유하여 최종적으로 만추리아(오늘날의 중국 동북지방)에 이르고 있었다. 예조 니시키란 아이누의 비단이란 의미로 일본인은 아이누가 소지한 비단을 아이누 인들이 만든 것이라 오해하고 있었으나, 본래는 중국에서 만들어진 비단이었다. 현재 예조 니시키는 龍袍·蟒袍와 같이 봉제된 의복 형태나 옷감의 형태로 남아 있다.

중국제 비단이 아무르강 하류 지역에까지 운반된 것은 중국왕조가 조공 교역

\* This work was supported by the Ministry of Education of the Republic of Korea and the National Research Foundation of Korea(NRF-2020S1A6A3A0 1054082).

\*\* 函館工業高等專門學校 特命教授

을 행하였던 게 기인한다. 13세기 후반 이 지역에 진출한 몽골제국·원조는 니브흐(구칭은 길랴크)를 지배하에 편입시키고 아이누와 단속적으로 전쟁을 벌였다. 이렇게 아이누는 원조의 모피 교역 네트워크에 편입되었다. 15세기 초 명조는 위소제를 아무르강 하류 유역에 가지 전개하였다. 또 17세기 후반에는 청조가 이 일대에 변민 지배를 행하였다. 1809년 아무르 강변의 데렌에 이른 마미야 린조는 청조의 관원과 필담을 통하여 의사소통하여 조공의 모습을 그림으로 남기고 있다. 여기에는 변민들이 흑담비의 모피를 공납하고 비단을 하사하는 모습도 묘사되어 있다. 이 비단이 바로 일본인에게 에조 니시키라 불렸던 비단이었다.

□ 주제어

에조 비단, 아이누, 홋카이도, 만추리아, 북방교역

---

## I.はじめに

1923年に出版された『アイヌ神謡集』の序文で、知里幸恵(1903-1922)はアイヌのかつての姿について、次のように言っている<sup>1)</sup>。

その昔この廣い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚兒の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、眞に自然の寵兒、なんという幸福な人だちであつたでしょう。冬の陸には林野をおおう深雪を蹴って、天地を凍らす寒氣を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鷗の歌を友に木の葉の様な

---

1) 知里幸恵、『アイヌ神謡集』、岩波書店、1978、p.3.

小舟を浮べてひねもす魚を漁り、花咲く春は軟らかな陽の光を浴びて、永久に嘯  
 ずる小鳥と共に歌い暮して路とり蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃うすすきをわけて、宵まで鮭とる篝も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、円かな月に夢を結ぶ。  
 嗚呼なんとという楽しい生活でしょう。……

この文章は、日本でアイヌ史・アイヌ文化に興味を持つほとんどの人が、  
 讀んだことがあると言えるくらい、有名な文章である。夭折したアイヌ民族  
 出身の女性が、自らの民族の過去と未來を語った文章として、廣く知られ  
 ている。

知里幸恵は、1903年に現在の北海道登別市のぼりべつで生まれ、伯母であり養  
 母でもあった金成マツかななり(1875-1961)の養育下で少女時代を現在の旭川市あさひかわの  
 郊外の近文ちかぶみで過ごした。そこに、当時は少壯のアイヌ語学者であった金田一きん だいち  
 京助きょうすけ(1882-1971)が調査に訪ねてきた。その際の知里幸恵と金田一京助  
 との出会いについては、後に金田一がさまざまな形で書き残しており、「近  
 文の一夜」として伝説と化した感がある。知里幸恵は、金田一の勧めで上京  
 し、『アイヌ神謡集』の校正を終えた直後の1922年9月18日、東京の金田一  
 の自宅で急死している。

一方、1897年に現在の旭川市すなざわで生まれた砂澤クラ(1897-1990)というア  
 イヌの女性がいる。知里幸恵は1903年の生まれだから、砂澤クラの方が6歳  
 年長である。彼女が晩年になって自分の思い出を語った『ク スクップ オルシ  
 ペー私の一代の話』のなかに、つぎのような話がある<sup>2)</sup>。

祖父のモノクテエカシが、いつも聞かせてくれた孫じいさん(曾祖父)の、そ  
 のまたじいさんの時代の話です。むかし、むかし、アイヌたちは毛皮を船いっぱ

2) 砂澤クラ、『クスクップ オルシペー私の一代の話』、北海道新聞社、1983、pp.34-36。

いに積んで遠い海を渡り、アトゥイヤコタン(海の向こうの国=大陸)へ行っては、宝物や着物、食べ物や酒と換えて帰ってきていました。……宝物の中に、大昔、アトゥイヤコタンから持って来たという古い布がありました。絹糸の部分はすり切れ、金糸だけがすっかり茶色になって残っていました。ユーカラに歌われているコンカニコソソテ(金の着物)にそっくりでした。あの布が残っていたら、いまの学問で調べると、アイヌがアトゥイヤコタンまで行っていたことがはっきりとわかると思います。残念でなりません。

アイヌ民族の祖先が、大陸にまで交易に行っていたという砂澤クラの話は、多くの読者には初耳なのではないだろうか。これまでアイヌ民族を語る時には、知里幸恵の語った内容から導きだされた「自然と共生するアイヌ」像のみが取りあげられてきた。砂澤クラの話にある、「交易民としてのアイヌ」像とは全く対局にあると言ってもよい。そうであるにもかかわらず砂澤クラと知里幸恵の二人は、ある時期に旭川という同じ町に住んでいたのだ。砂澤クラの本には、少女時代の知里幸恵についての思い出が記されている。ある時期に、同じ町で生活していた二人のアイヌの女性が、このような対照的な話を残している事実は興味深いことである。

小論では、砂澤クラの話を出発点にして、大モンゴルの時代およびそれ以降の時代のアイヌの北方交易の歴史についてたどってみよう。そこからは、これまでは知られてこなかった、アイヌのダイナミックな歴史が見えてくるはずである。

## II. アトゥイヤコタンから来た金の着物

### 1) 蝦夷錦とは何か

砂澤クラが言うコンカニコソテというアイヌの着物とはいったい何を指すのか。アイヌ語でコンカニは金のこと、日本語の<sup>こがね</sup>黄金からアイヌ語に入ったことばである。日本の東北地方の方言では、金属一般を意味する金=「かね」を「かに」と発音する。コンカニの「かに」は、これに当たる。つぎにコソテは、日本語の小袖=「こそで」からアイヌ語に入ったことばであり、日本製の着物全般を意味する言葉として使われた。

ではコンカニコソテとはどのような着物なのか。筆者の考えでは、この着物は<sup>えぞにしき</sup>蝦夷錦あるいは<sup>さんたんにしき</sup>山丹錦である。

蝦夷錦とは、前近代に北方交易でアイヌの人たちの元にもたらされた中国製の絹織物の総称である。その文様は多くは龍文であるが、<sup>ぼたん</sup>牡丹などの花の文様のものもあることが知られている。龍文の蝦夷錦は、もともとは清朝の役人の制服であり、<sup>もうぼう</sup>蟒袍という呼び名があった。蝦夷錦は、もともとは中国の江南地方で作られた絹織物であり、北京からアムール河(黒龍江)を下り、間宮海峡を渡ってサハリン島(樺太)を經由し、北海道に入るという道りを経て、日本にもたらされたものである。5,000キロにも及ぶ長い道り、絹織物がはるばる運ばれたのは、清朝の<sup>へんみん</sup>辺民支配のためである。清朝は、アムール河流域からサハリン島に住む先住民を辺民という組織に編成して毛皮貢納民とした。清朝は先住民にhala i da(一族の長)やgašan i da(村の長)などの位を与えた。辺民は、黒テンの毛皮の貢納が義務づけられる代わりに、その位に応じた役人の制服などが与えられた。その制服がさらに交易されて北海道アイヌの手に入り、日本人が蝦夷錦あるいは山丹錦と

呼んだのである<sup>3)</sup>。辺民の多くは、アムール河の下流域やサハリン島に住むオルチャ(ウリチ)やニヅフなどの先住民であった。彼らはサンタン人と呼ばれたが、それはアイヌが彼らをジャンタあるいはチャンタと呼んだのが訛った呼び名とされている。アイヌの北方交易を山丹交易と、蝦夷錦を山丹錦ともいうのは、このような理由からである。

1809年、間宮林蔵(1775-1844)はアムール河下流域のデレン(Deren)にあった満洲仮府を訪れ、トジingga(Tojingga)、ボルフンガ(Bolhūnga)、フェルヘンゲ(Ferhengge)という清朝の三人の官吏と名刺を交換し、辺民となっ

た先住民たちが、黒テンの毛皮を朝貢する様子を見ている。間宮林蔵が帰国後、村上貞助の助けを借りてまとめた『東韃地方紀行』の挿繪は、デレン



【図1】 間宮林蔵『東韃地方紀行』より「徳楞哩名假府」国立公文書館蔵



【図2】 間宮林蔵『東韃地方紀行』より「進貢」国立公文書館蔵

3) 松浦茂、『清朝のアムール政策と少数民族』、京都大学学術出版會、2006。

での朝貢の様子をいきいきと伝える貴重な記録である。『東韃地方紀行』によれば、辺民たちは黒テンの毛皮を一枚献上し、その代わりとして絹織物を一巻下賜されている。この絹織物が蝦夷錦であり、本来は着物に縫いあげられたものが下賜されていたわけだが、清朝の雍正帝の命令で、服に仕立てる手間を省くために一着分の反物を与えても良いことになったのである。現在、北海道では30点ほど、青森縣では40点ほどの、蝦夷錦といわれる資料が確認されている。それらは、服に仕立てあげられたものから、反物のままのもの、打敷・袱紗うちしきふくさなどに作りかえられたものまでさまざまであるが、その多くは來歴がはっきりせず、明治時代以降に北方交易以外のルートで持ち込まれた可能性を持つものもある。

そのため蝦夷錦を研究するうえでは、來歴の調査が重要である。北海道や青森縣の資料には、來歴が不明の物が多く、確實に蝦夷錦といえる資料は、せいぜい10点ほどしかない。

## 2) 蝦夷錦の現存資料

これまで、蝦夷錦の調査は主に北海道で行われてきた。北海道の蝦夷錦で龍文のものは、文様からは三つの種類に分類される。

A群は、正面向きの龍、これを座龍というが、その座龍が胸と背、それに両肩にあるので四つになる。それに加え昇り龍、昇龍が向い

合せになって正面に一組、背面に一組あるので、龍は合計八つになる。釧路市立博物館蔵の「山丹錦」や兒玉こだまコレクションの「山丹服」(市立函館博物



【図3】兒玉コレクション蔵「山丹服」A群

館藏)などがこれに屬する。

B群は、首の周圍をとり巻くように龍が置かれ、腰と裾の部分に横向きの龍、行龍がある。この群には、市立函館博物館藏の「山丹服」が屬する。

C群は、A群とB群の間中といえるもので、胸と背、兩肩にはA群と同様に座龍が四つあり、裾にはB群と同様に横向きの龍がある。このグループに屬するのは市立函館博物館藏の「山丹服」である。

北海道の資料ではA群が最も多く、B群・C群の順に少なくなる。なかで



【図4】市立函館博物館藏「山丹服」B群



【図5】市立函館博物館藏「山丹服」C群

もB群には、打敷や袱紗などに作りかえられたものが多く、しかも反物の形で持ち込まれたとみられる資料が多いという特徴がある。反物の蝦夷錦が存在すること自体は不思議ではない。しかし、なぜB群に集中しているのかは分からない。あとにのべるように、蝦夷錦は中国への朝貢に對して与えられたものであるから、何か政治的な事情があったのかもしれない。

今のところ、信賴できる資料としては、市立函館博物館藏の二着の「山丹服」をあげることができる(図4、図5)。これは、函館の豪商・杉浦嘉七(すぎうらかしち(1843-1923)が1879年に、開拓使函館支廳仮博物場(現在の市立函館博物館)の開館祝いとして寄贈したものである。

### III. モンゴル帝国・元朝のサハリン島への進出とアイヌ

#### 1) 大モンゴルの時代とは

蝦夷錦がアイヌの人たちの手に入った背景には、アイヌの北方交易の進展があったと考えられるが、その交易はいつごろから始まるのであろうか。アムール河下流域とサハリン島についての文献史料が残っているのは、モンゴル帝国・元朝の時代以降である。『元一統志』には、遅くとも金代にはアムール河の下流域に奴兒干城が置かれたと記されているが、この位置はヌルゲン／ヌルガンという地名から見て<sup>4)</sup>、元代に東征元帥府が置かれ、明代にはヌルゲン都司が置かれた、現在のティル(Tyr)村のことと思われる。ただし発掘によって位置がわかっているのは、明初に女真人の宦官であるイシハによってヌルゲン都司に併設されたヌルゲン永寧寺の址のみであり<sup>5)</sup>、東征元帥府やヌルゲン都司の実態はわからない。元帥府や都司(正しくは都指揮使司)という名称が連想させるような、官衙としての建物を構えていたかどうかは不明である。

モンゴル帝国は、かつては殘虐な侵略者として描かれてきた。それは、モンゴル帝国の侵略を受けたロシアや東歐諸国で著しい。二度にわたる元

4) 奴兒干都司は、「ヌルガンとし」と読まれてきた(『アジア歴史事典』第七卷、平凡社、1961、p.271)。しかし長田夏樹氏による1413年の「勅修奴兒干永寧寺記」のモンゴル文・女真文の対訳の研究によれば(「奴兒干永寧寺碑蒙古女真文釈二稿」、『長田夏樹論述集』下、ナカニシヤ出版、2001年、pp.188-202)、モンゴル文では「nurgāl-ün(奴兒干の)」(p.190)と、女真文では「nu-ru-gen ni(奴兒干の)」(p.194)と転写されており、ヌルゲンがより正しいようである。

5) A.R.アルテミーエフ著(垣内あつと譯、菊池俊彦・中村和之監修)、『ヌルガン永寧寺遺跡と碑文—15世紀の北東アジアとアイヌ民族』北海道大学出版会、2008年。

寇を経験した日本も同様であった。しかし、1980年代以降、<sup>すぎやまさあき</sup>杉山正明ら日本のモンゴル史研究者が明らかにした新しいモンゴル帝国のイメージは、それらとは全く逆といってよい<sup>6)</sup>。確かにモンゴルは殺戮を行ったが、それはあくまで抵抗した場合に限られ、最初から降伏の意志を表した者に對しては、税金を納めることを条件に、それまでどおりの生活を認めた。また、ほんの数回あった殺戮の事実を意図的に廣めることにより、相手の恐怖をあおり立て、降伏するように促したというのである。モンゴル帝国に従った者は、少額の商業税を納めるだけで、モンゴル帝国の交易ネットワークのなかで交易を行うことができた。そしてその交易ネットワークは、ユーラシア大陸を覆う巨大なものであった。このような繁榮の時代を「大モンゴルの時代」とよぶこともある。ユーラシア各地の人びとと同様に、アイヌの人たちもまた、モンゴルの交易ネットワークのなかに組み込まれてその後の歴史を歩んでいくことになる。

## 2) モンゴル帝国・元朝のサハリン島への進出と自主土城の築造

元朝の正史である『元史』や、元代の有名な文章を集めた『国朝文類』などに、骨嵬<sup>クイ</sup>についての記載が僅かながら見える。骨嵬とは、ウリチ語などのツングース諸語やニヴフ(旧称はギリヤーク)語などで、アイヌを意味する kuyi~kuyi~kuiを漢字の音で宛てたものである。元朝は、1264年に初めて骨嵬を攻撃した。その20年後、1284年に骨嵬を攻撃すると、以後85年、86年と三年續けて骨嵬を攻めている。これには、吉里迷<sup>ギレミ</sup>から元軍に對して、骨嵬が自分たちを攻めるといふ訴えがあったため、吉里迷からの願いで骨嵬を攻めたと、『元史』に記されている。ただしこれは、あくまで元朝側の記述で

6) 杉山正明、『クビライの挑戦—モンゴルによる世界史の大轉回』、講談社、2010年。

ある。吉里迷とは、吉列迷あるいは吉烈迷とも書くが、古アジア系の狩獵漁撈民であるニヅフの祖先の呼称gillemiを漢字の音で宛てたものである。

元軍がサハリン島に進出した可能性を示す証拠として、<sup>しらぬしどじょう</sup>白土城という遺構がある。白土城は、サハリン島西岸の最南端にあるクリリオン(Kril'on)岬から2キロメートルほど北上した海岸段丘上にある砦の遺跡である。白土城は115m×114mというほぼ正方形で、外側に堀が内側に土壘がある。2002年の発掘調査によって、土壘の構造が<sup>はんちく</sup>版築であることがわかった。版築は万里の長城にも使われた中国の土木技術である。またこの時期の北海道には、版築の建築物が見あたらないので、この土城は大陸経由の技術で築造されたものと考えられる。

白土城については、江戸時代後期の日本語史料に記述がある。<sup>こんどう</sup>近藤重藏(1771-1829)はレプンクルが築造したと記している<sup>じゅうぞう</sup>7)。レプンとは海の沖合い、クルとは人を意味するので、レプンクルは海の向こうから来た人という意味である。つぎに<sup>まつだ でんじゅうろう</sup>松田傳十郎(1769-1842)は、胡人が作ったという言葉い伝えを記している<sup>8)</sup>。胡人とは、漢語で西方や北方に住む異民族のことであり、<sup>まみやりんぞう</sup>近藤重藏のレプンクルに当たるものであろう。さらに<sup>まみやりんぞう</sup>間宮林藏は、土

7) 『近藤正齋全集』第一、国書刊行會、1905年、pp.31-32。

シラヌシ〔西部ニ見ユ〕

トアクナイボ沙濱グイ〔カラフト地西南ノ盡頭ナリ。夷住アリ。此處ノ丘上ニ古城跡アリ、土人名テイチヤシト云、其制方百間四方許アリテ、門ノ跡一ヶ所、其外土手アリ。夷人云、古レブルグルノ攻來リシ時築ク所ナリト。夷語ニレブンハ海、グルハ衆ニシテ、惣テ海西ヨリ來ルモノヲ指ス。山丹人モレプンクル也。肅慎靺鞨モレフンクルナリ。蝦夷ニレプンクル合戦ノ淨瑠璃アリ。〕

8) 『日本庶民生活史料集成』4巻、三一書房、1969、p.126。

一、シラヌシより去る事凡一里程東海岸<sup>あざ</sup>に字グイと稱する所あり。其處に砦の舊跡あり。夷言にチヤシと稱す。凡三百間四方にして、三面に堤を築き、前の一方は堤なし。三方とも堤の下ことごとくから堀にて、今に其あと連綿としてあり。所の老夷に尋るに、何のとき又何ものゝ造るにや年月は勿論砦主どしものなし。其製嶋夷の作る處にあらざるゆへに圖を顯す。左のごとし。〔又老夷いふ昔、胡人作ると云傳ふ。〕

城の位置はコマハウといい、誰が造ったかわからないが、アイヌが造ったものではないと記している<sup>9)</sup>。このように白土城は大陸系の土城で、アイヌ以外の集団が造ったものであると考えられていることがわかる。

さて『国朝文類』の大徳元年(1297)の記事に、サハリン島における元軍の據点として果夥 kuo-huo という地名が記されている。筆者は、地名の音の類似およ

び『国朝文類』に見える他の地名との位置関係から、果夥が間宮林藏のいうコマハウではないかと考えている<sup>10)</sup>。もしこの考えが正しいとすれば、果夥は白土城のこととなり、版築という中国の建築方法で築造されていることも付合する。また元軍は、サハリン島の南端にまで軍を進め、ここに砦を築いていたことになる。



【図6】 間宮林藏『北夷分界余話』より「チヤシ内」国立公文書館蔵

9) 間宮林藏、『東韃地方紀行他』、平凡社、1988、pp.25-26。

シラヌシを去る事凡一里許東海岸にコマハウと称する處あり。其処に塔とりでの旧趾あり、夷言チャシと称す。其状図のごとし。三面に堤を築き、前一方堤を設けず、其中凡二十四、五間あるべし。三方の堤下悉く堙こぶを穿つ。何れの時又何者の造る所にや、年月・塔主共にしるべからず。其製島夷の造る處にあらざるに似たり。

10) 中村和之、「中世における北方からの人の流れとその変動—白土城をめぐる—」、『歴史と地理』580、2004。

### 3) 元朝と骨嵬との関係

『国朝文類』を検討すると、吉烈迷には元朝の支配のもとに百戸や千戸などの身分秩序が形成されていた。骨嵬にはそのような身分がなく、元朝の支配体制の外側にいたことがわかる。ではアイヌと元朝との間には何の接触もなかったのかといえば、そうではない。そのことを示す興味深い記述が、元代の大都(北京)の地誌である熊夢祥『析津志』<sup>ゆうぼうしょうせきしん し</sup>にみえる。著者の熊夢祥の正確な生没年は不明だが、明代のはじめに九十余歳で没したとされているから、本書の成立は14世紀の前半と考えられる。『析津志』の原本は明代の末期には失われ、他書に引用された佚文を集める作業が進められている。同書の物産、鼠狼之品に<sup>11)</sup>、

銀鼠カラコルム、さくほく もの こうきゆうと爲し、山われめの石すんでの罅うまれたばかりの中に産うむる。初ひじょう生おには赤毛あおみがに青かっているが、雪ふれに経たちると則ちち白まくなる。愈なんども年へを経て深とても雪しろい者ひじょうは愈おに奇きちようとされ、遼東りようとうの骨嵬クイ(のこれところ)に之やが多じんい。野人やじんが海上やぶの山おや藪おの中に於おいて鋪こやを設そこけ以こて中国のふし之物こうきと易のであるする有かれが、彼なと此なとは俱たがいに相あに見あわない、此これが風俗あるなので也。此この鼠あるの大小おなじや長短なは等なでは不なく、腹かすかの下きいろが微さきに黄いい。……  
諸もろもろの鼠こでは惟この銀鼠じようとうが上さと爲れ、尾とがの後さきの尖さった上きが黒いい]

とある。海上とは「海島」の誤りで、サハリン島を意味する。このように、サハリン島では骨嵬と元朝に仕える野人とが銀鼠(オコジョ)の沈黙交易を行っていたのである。野人の交易品が中国の物資であるという事実は、沈黙交

11) 北京図書館善本組編、『析津志輯佚』、北京古籍出版社、1983、p.233。

銀鼠(和林朔北者爲精、産山石罅中、初生赤毛青、經雪則白。愈經年深而雪者愈奇、遼東嵬骨(骨嵬の誤り)多之。有野人於海上山藪中鋪設以易中國之物、彼此俱不相見、此風俗也。此鼠大小長短不等、腹下微黃。……諸鼠惟銀鼠爲上、尾後尖上黑。]

易という原始的な交易の形を採りながら、元朝と骨嵬との間に交流があったことを示す。その理由は、骨嵬は野人のように、元朝と朝貢交易を行うことが許されなかったためと考えられる。元軍と骨嵬との間に紛争が續いたことを考えあわせると、骨嵬は元軍からすれば討伐の対象であったのだろう。白主土城の築造も、そのような事情からなされたと考えられる。

なお、ここでオコジョ(銀鼠)の毛皮の用途について触れておきたい。モンゴル帝国・元朝では、1年に13回、ジスンの宴という宴會が開かれていた。jisun とはモンゴル語で色の意味であり、参加者が同じ色の衣装を着て集うことによって一体感を高めた。モンゴルの宮廷で最も重視されたジスンの宴は、正月の「白い宴」であり、大カアンなどの王族は皆、白い毛皮を着たことがマルコ・ポーロの記録にある。また劉貫道筆といわれる「元世祖出獵圖」<sup>りゅうかんどう</sup>では、宴の場面ではないがクビライ・カアンがオコジョの冬の毛皮で作ったコート<sup>げんせい そしつりょうず</sup>を着ている。戦いの一方で、元朝はアイヌからオコジョの毛皮を得ていた。

#### 4) アイヌの沈黙交易をめぐる諸史料

アイヌに関しては、沈黙交易(Silent trade)の記録がいくつか残されている。沈黙交易とは、交易をする者同士が、直接接触をしないで交易が行われることで、いくつかの方法がある<sup>12)</sup>。お互いに相手が見える位置にはいるが接触はしない方法や、『析津志』のように相手を見ない方法がある。沈黙交易の最も古い報告は、古代ギリシアのヘロドトス『歴史』巻4、196節に、北アフリカでカルタゴ人がリビア人と行っている例である<sup>13)</sup>。

12) Philip James Hamilton Grierson, *The Silent Trade : A Contribution to the Early History of Human Intercourse*, William Green & Sons, Law Publishers, Edinburgh, 1903. フィリップ・ジェイムズ・ハミルトン・グリアスン(中村 勝 譯)、『沈黙交易—異文化接触の原初的メカニズム序説』、ハーベスト社、1997。

カルタゴ人の話には次のようなこともある。「ヘラクレスの柱」以遠の地に、あるリビア人の住む国があり、カルタゴ人はこの国に着いて積荷をおろすと、これを波打際なみうちぎわに並べて船に帰り、狼煙のろしをあげる。土地の住民は煙を見ると海岸へきて、商品の代金として黄金を置き、それから商品の並べてある場所から遠くへさがる。するとカルタゴ人は下船してそれを調べ、黄金の額が商品の価値に釣合うと見れば、黄金を取って立ち去る。釣合わぬ時には、再び乗船して待機していると、住民が寄ってきて黄金を追加し、カルタゴ人が納得するまでこういうことを続ける。双方とも相手に不正なことは決して行わず、カルタゴ人は黄金の額が商品の価値に等しくなるまでは、黄金に手を触れず、住民もカルタゴ人が黄金を取るまでは、商品に手をつけない、という。

これは相手が見える位置にいる例である。ヘロドトスのつぎに古い例なのではないかと思われる記録が、『日本書紀』齊明天皇6年(660)に見える<sup>14)</sup>。

三月、阿倍臣あべのおみ〈名を欠く〉を遣わして軍船二百隻を率い、肅慎国あしほせこくを討たせた。阿倍臣あべのおみは陸奥みちのくの蝦夷えみしを自分の船にのせ、大河のほとりまできた。すると渡わた

13) ヘロドトス(松平千秋譯)、『歴史』中、岩波書店、1972、p.110。

14) 坂本太郎ほか校注、『日本書紀』下、岩波書店、1965、p.343。

三月、遣阿倍臣、〈闕名〉。率船師二百艘、伐肅慎國。阿倍臣、以陸奥蝦夷、令乘己船、到大河側。於是、渡嶋蝦夷一千餘、屯聚海畔、向河而營。々中二人、進而急叫曰、肅慎船師多來、將殺我等之故、願欲濟河而仕官矣。阿倍臣遣船、喚至兩箇蝦夷、問賊隱所與其船數。兩箇蝦夷、便指隱所曰、船廿餘艘。即遣使喚。而不肯來。阿倍臣、乃積綵帛・兵・鐵等於海畔、而令貪嗜。肅慎、乃陳船師、繫羽於木、舉而爲旗。齊棹近來、停於淺處。從一船裏、出二老翁、廻行、熟視所積綵帛等物。便換着單衫、各提布一端、乘船還去。俄而老翁更來、脫置換衫、并置提布、乘船而退。阿倍臣遣數船使喚。不肯來、復於弊路辨嶋。食頃乞和。遂不肯聽。〈弊路辨、渡嶋之別也〉。據己柵戰。于時、能登臣馬身籠、爲敵被殺。猶戰未倦之間、賊破殺己妻子。

<sup>しま</sup>島の蝦夷が一千余、海のほとりにむらがり、河に面して屯營<sup>とんえい</sup>していた。營の中の二人がにわかにか呼びかけて、「肅慎<sup>あしはせ</sup>の軍船が多数おしかけて、我らを殺そうとしていますので、どうか河を渡ってお仕えすることを、お許し下さい」という。阿倍臣は船をやって二人の蝦夷を召し寄せ、賊の隠れ場所と船の数を尋ねた。二人の蝦夷は隠れ場所を指さして、「船は二十隻あまりです」という。使いをやって〔肅慎を〕呼んだ。しかし〔肅慎は〕やってこなかった。そこで阿倍臣は、染めた絹・武器・鐵などを海辺に積んで、見せびらかし欲しがらせた。肅慎は軍船を連ねて、鳥の羽を木に掛け、それを上げて旗としていた。舟の棹を揃えあやつって近づき、浅いところにとまった。一隻の舟の中から、二人の老翁が出てきて、積み上げられた染めた絹などの品物をよくよく調べた。それから裏地のついていない衣服に着替えて、それぞれ布一卷を提げて、船に乗って引上げた。しばらくすると老翁がまた来て、着替えた衣を脱ぎ、持ってきた布を置いて、船に乗って帰った。阿倍臣は多くの船を出して、肅慎人を呼ばせたが、聞き入れることなく、<sup>へろべのしま</sup>弊賂弁島に帰った。しばらくしてから和を乞うてきたが成立せず、<sup>わた</sup>弊賂弁は、<sup>しま</sup>渡嶋の一部分である、自ら築いた柵にこもって戦った。<sup>のどのおみまむたつ</sup>能登臣馬身龍は、敵のために殺された。戦いが充分熟さないうちに、敵方は自分らの妻子を殺して敗走した。

これも相手が見える例である。なおこの史料には「阿倍<sup>おみ</sup>の臣」としか記されていないが、これは阿倍比羅夫<sup>あべのひらふ</sup>のことで、662年の白村江の戦いで日本が唐と新羅の連合軍に敗れた時の日本側の將軍である。白村江の戦いの前に、比羅夫は北方のエミシを服屬させるために北に遠征した。その際「あしはせ」という集団と接触し、沈黙交易による接触を試みた。この時は交易が實現せず、結局は戦いになっている。ここで登場するエミシがアイヌ民族の祖先といえるかについては、いろいろと議論があるところだが、日本の東北地方に残っているアイヌ語地名の分布から考えると、エミシのなかにアイヌ

語を話す人がいたことは疑いが無い。また「あしはせ」について筆者は、サハリン島から北海道のオホーツク海沿岸に居住していた、オホーツク文化人が南下したのではないかと考えている<sup>15)</sup>。なお「あしはせ」については、かつては「みしはせ」と読んでいたが、今は「あしはせ」と読むという見解が有力である。つぎに、日本近世の学者、政治家として知られる新井白石の『蝦夷志』<sup>あらいはくせき</sup>には<sup>16)</sup>、

東北の海中で国をなす<sup>もの</sup>者は、アイヌの伝えるところでは、およそ三十七で、アイヌが通交を持っているのはただそのなかの一つだけである。このほかにについては、詳しくのべることはできないと言う。〈東の海の諸島は、……アイヌは總称してクルミセという。アイヌが往來<sup>まきし</sup>しているところは、すなわちキイタツプである。聞くとところでは、その交易の方法は極めて奇妙である。毎歳<sup>まいとし</sup>アイヌが船に品物を載せて航海し、〔キイタツプの〕海岸から1里ばかりのところで船を止める。〔キイタツプの〕住人が見つけて、すぐにその集落から出で行き、山の上に避難する。アイヌは彼らの品物を運んで、海辺<sup>まきし</sup>に並べて船に戻る。そして最初の位置に船を止める。そうすると〔キイタツプの住人が〕交易品を運び、つぎつぎとやって来て、それぞれ自分の欲しい物と交換し、余分だと思ったアイヌの品物と自分の交易品を置いて行ってしまふ。アイヌがまた来て品物を回収して戻る。もし〔キイタツプの〕住

15) 中村和之・竹内 孝、「奥尻島出土のオホーツク式土器をめぐる試論—土器の胎土中の砂粒の成分分析による」、小口雅史編、『海峽と古代蝦夷』高志書院、2011。

16) 新井白石(原田信男校注)、『蝦夷志 南島志』、平凡社、2015、p.88。

国於東北海中者、夷中所伝、凡三十七。而夷人所通、唯其一、其余則不可得詳云。〈東海諸島、……夷中總称曰クルミセ。夷人所通、即キイタツプ。嘗聞其互市例極奇。毎歳夷人裝載船貨以行、去岸里許而止。島人候望、乃去其聚落、避之山上。夷人運搬其貨、陳列海口去、而止如初。既而島人負擔方物、絡繹來會、各自易取其所欲之物、閣置其余及厥産而去。夷人又至收載之而還。若其方物過多、則或留其余、或置船貨而去。方物皆獸皮。船貨則米塩酒烟及櫛布之屬云。〉

人が置いていった交易品が多すぎるのであれば、アイヌは〔キイタップの住人が〕余分だと思った〔アイヌの〕品物をそこに置いていくか、あるいは〔アイヌが〕船に積んできた品物をそこに置いて行ってしまふ。〔キイタップの住人の〕交易品はみな獣の皮である。アイヌが船で運んできた品物は、米、塩、酒、タバコと木綿の布などである。

とある。ここでも相手が見える方法である。『蝦夷志』は1720年の序文があるが、北海道の東部にある霧多布きりたっぶで、現地の住人のアイヌと船に乗ってやって来たアイヌとの間で、沈黙交易が行われている。ここで船に荷物を積んでやって来たアイヌの積み荷が、すべて日本人との交易で手に入れるものであることから、霧多布に船で来るアイヌは、松前などの北海道の南西部から来ていることになる。なお「東北の海中で国をなす者は」とあるが、この「国」とは国家といえるようなものではなく、據点の集落という程度のものであろう。最後に、津村涼庵つむらそうあん たんかい『譚海』卷5「奥州津輕おうしゅうつがるより松前へ渡り并あわせて 蝦夷風俗の事」に<sup>17)</sup>、

……アイヌは刃物を作ることをしらず、またタバコもここにはない。全て日本から持って行って交易するのである。交易するところより奥へは日本人は行くことができないので、交易物を持ち運んで、その辺に並べておけば、アイヌが来て彼

17) 『日本庶民生活史料集成』8巻、三一書房、1969、p.86。

……蝦夷人は刃物を作る事をしらず、又たばこも彼地になし、皆此邦より持渡りて交易する也。交易する所より奥へは此邦の人ゆく事ならぬゆゑ、交易のものを持はこびて、其所にならべ置けば、ゑぞ人來りて彼の方の産物に取かへもてゆく也。昔は斧・まさかり・庖丁・小刀の類、いくらもなまくら物を持行て交易せしが、今はゑぞ人かしく成て、刃物をならべ置所へ石を抱き來り、刃物を其石にうちあてて試る、刃こぼれ又はまがりなどすれば、打やりて返りて返りみず、刃よきものをゑりてかふる事に成たり。

らの品物と交換して持ち帰るのである。昔は<sup>おの</sup>斧・<sup>ほうちよう</sup>まさかり・<sup>こがたな</sup>庖丁・小刀など、いくつ  
も粗悪品を持って行って交易したが、今はアイヌが賢くなって、<sup>はもの</sup>刃物を並べている  
ところへ石を持って行って、刃物をその石に打ち当てて試してみる。刃こぼれをし  
たり曲がったりなどした場合は、[刃物を]捨てて返りみようとしない。刃の良いも  
のを選んで交易するようになった。

とある。『譚海』には1795年の序文がある。津村淙庵が言っている沈黙交  
易が、北海道のどこで行われたことなのかは不明である。ただ1795年とい  
えば、18世紀末である。1789年に北海道の東部で起きたアイヌの蜂起であ  
る、クナシリ・メナシの戦いを受けて、1799年に江戸幕府が<sup>ひがしえぞち</sup>東蝦夷地を直轄  
支配する直前のことになる。このようなことが18世紀末に、本当に行われて  
いたのであろうか。以上のべてきたようにアイヌに関する記録には、7世紀、  
14世紀、18世紀の末まで長期に涉って沈黙交易に関する記述が見られる。  
なぜアイヌに係わって、このように古い形式の交易についての報告があるの  
か。それは事実であったのか、あるいは記録者がアイヌに対して未開だとい  
う認識をもっていたことによって作られた<sup>げんせつ</sup>言説なのか。その事情はわからな  
い。今後の研究課題としたい。

またモンゴル帝国の時代には、ユーラシア大陸の各地でオコジョの交易  
が行われた。イブン・バットゥータ『大旅行記』には、ヴォルガ川中流域のブル  
ガールの北方「暗黒の地」で行われるオコジョの冬の毛皮(アーミン)の沈黙  
交易についての記録がある。なおこの「暗黒の地」とはバレンツ海の沿岸  
で、現在のロシア連邦のネネツ自治管区の付近と思われる<sup>18)</sup>。

旅行者たちはこうした水なき廣漠な土地をたっぷり40日行程を費やして踏破

<sup>やしまひこいち</sup>  
18) イブン・バットゥータ、家島彦一訳、『大旅行記』4、平凡社、1999、pp.47-48。

すると、暗黒のところで車を降りる。そして彼らは各自で持ってきた商品をそこに置き去りにして、彼らのいつもの定めの停泊地に引き返す。翌日になって、彼らの商品を調べに戻ると、その商品の前に貂<sup>てん</sup>、灰色栗鼠<sup>りす</sup>とアーミン[の皮革など]が置いてあるのを見つける。その商品の持主が自分の商品の前にあるものに満足すれば、そこに置かれたものを取る。もしそれに満足しなければ、そのままにそれを放置する。するとそこの人々、つまり暗黒[の土地]の住民はその毛皮類を増しておくこともあるが、時には彼らの[毛皮類の]品物を引き上げてしまい、商人たちの商品をそのまま残す場合もある。このようにして彼らとの賣り買いを行うのであるが、そこに行った人たちは彼らの賣り買いの相手がジンなのか、それとも人間なのか、相手が誰なのか見た者がいないので、全く分からない。なお、アーミンこそは毛皮類のなかでも最良のもので、インド地方ではその毛皮[の外套]が1,000ディーナールにもなる。それをわれわれの金貨に換算すると250[ディーナール]になる。それは小型動物の皮革であり、純白色で、その長さは1シブル、その尻尾は長いので、人はそのままの状態<sup>えり</sup>で毛皮にする。貂は、それと比べると価値は劣るが、それで作った毛皮の外套は400ディーナール前後である。こうした毛皮類の特殊な性質の一つとして、それには虱<sup>しらみ</sup>が付かないので、シナのアミーールたちやその高位高官たちは、その一枚皮を彼らの毛皮の外套の襟<sup>えり</sup>の部分に付けている。同じように、ファールスや兩イラクの商人たちも使っている。

この例は『析津志』のように相手を見ない沈黙交易である。このように、モンゴル帝国の北西辺境から北東辺境に至る地域で、毛皮の交易が行われていた。モンゴルの毛皮交易のネットワークは、ユーラシアを覆うものであったと思われ、アイヌはその北東辺境部における交易の担い手だったのである。

## IV. 明朝の北東アジア政策と清朝とロシアとの交渉

### 1) 明朝のヌルゲン都司経営と清朝のサハリン島進出

元代に續く明代には、永樂帝の命令でティル村にヌルゲン都司を設置したイシハラが、ヌルゲン永寧寺を併設した。イシハラが立てた1413年の「勅修 奴兒干永寧寺記」には<sup>19)</sup>、

〔永樂〕十年冬、天子は復た内官の亦失哈等に命じて其の国に載至らせた。海西自り奴兒干に抵り、海の外の苦夷の諸民に及ぶまで、男婦に賜うに衣服・器用を以てし、給えるに穀米を以てし、宴すに酒饌を以てしたところ、皆踊躍して、一人も梗化して率わぬ者は無かつた。……

という表現があり、ヌルゲンから海の外に苦夷が住むと認識されるようになった。苦夷ないし苦兀とは明代のアイヌの表記である。このように、明代にはアイヌが朝貢交易の相手として認識されていたことがわかる。「勅修奴兒干永寧寺記」で明朝が下賜



【図7】 間宮林蔵『東韃地方紀行』より「サンタンゴエ地図」国立公文書館蔵

19) 『勅修奴兒干永寧寺記』1413年(漢文)

〔永樂〕十年冬、天子復命内官亦失哈等載至其國。自海西抵奴兒干及海外苦夷諸民、賜男婦以衣服・器用、給以穀米、宴以酒饌。皆踊躍懽、無一人梗化不率者。

した「衣服」とは絹織物であった可能性が高い。漢文で「衣服」とあるところは、女真文では「etu-ku(衣服)」であるが、モンゴル文では「toryan(緞子)」と「dägäl(衣服)」となっており、緞子があげられているからである<sup>20)</sup>。イシハのアムール河下流域への遠征は、永樂年間に5回、宣徳年間に2回を数えたが、サハリン島にまで軍勢を進ませたかについては、証據がなく不明である。1435年に宣徳帝が死んだ後は、明軍がアムール河下流域に派遣されることはなくなった。さらに1449年の土木の変で、明朝は北東アジアにおける勢力圏を失った。しかし、建州女直によって交易は続けられており、錦もアムール河下流域に持ち込まれていたようである。そのことと関連すると思われる史料が、松前藩の『新羅之記録』にある。1593年、松前藩の初代藩主・蠣崎(後に松前)慶廣は、九州肥前の名護屋城で徳川家康に面會したが、身につけていた「唐衣」を家康から褒められると、すぐさまこれを脱いで献上したと伝えられている。「唐衣」には「サンタンチミフ」という讀みが付せられている。これはアイヌ語で「山丹の着物」という意味である。

20) 『勅修奴兒干永寧寺記』のモンゴル文の該当部分は、長田夏樹, 「奴兒干永寧寺碑蒙古女真文釈二稿」注4, p.190に以下のようにある。

yung-lau arbaduyar on ubul sar-a-dur basa nuigön isiq-a[……]jaruju qai-si  
 永樂(の) 十番目の 年冬(の)月 にまた 内官 イシハ 差遣し 海西  
 äcä nurgäl kürtälä dalai-yin yadarkin küü-gi[……]är-ä äm-ä[……]da toryan  
 より奴兒干(に)至るまで海の 外の 苦夷 男 女 緞子  
 dägäl ba[……]kärägtü äd-i soyurqabasu yäkä ücükän ötägüs jalayus kigäd[……]  
 衣服 入用な 物品を 賜えば 大 小 老人 若者 及び  
 同じく女真文は、pp.193-194に以下のようにある。

yi-uŋ-lo juan anya tuve-eri nu-in-guon i-si-xa adi ba uŋgi-bi xai-si du-xi nu-ru-gen  
 永樂 十 年 冬(に) 内官 イシハ 等 を 派遣し 海西 より 奴兒干  
 də isi-ta-la mede-eri tu-li-xi ku-gi adi xaxa xexe nyalma də etu-ku bai-ta ga?  
 に 至るまで海(の) 外にある 苦夷等 男 女(の)人 に 衣服 仕事  
 uli-in be ali-ba sag-dai si-? amba osoho gemu ? ur-gun-je-meri da-ha-?  
 財貨を 授け 老 若? 大 小 すべて 喜 び 随い

17世紀になると、満洲族の王朝である清朝が中国の支配者となる。清朝は、当時世界の地理学界で論争となっていた幻の土地エゾに強い関心を持っていた。清朝はエゾを自国の領土の一部と考えており、1709年にイエズス會士のレジスらにアムール河下流域を、1711年には満洲人のサルチャンらにアムール河下流域とサハリン島の北部を調査させた。ただし清朝は、元代の東征元帥府、明代のヌルゲン都司のような恒常的な據点の建設はしなかったようである。1726年から27年にかけて、清朝はロシアと国境確定に関する交渉を北京で行い、その際ロシアから得た地図を見て衝撃をうけた。そこには、発見されたばかりのカムチャツカ半島がエゾであると記されていたからである<sup>21)</sup>。清朝は、1690年以降サハリン島の北部に勢力を伸ばしていたが、このことをきっかけとして、ロシアと對抗するためにサハリン島南部に積極的に進出した。



【図8】ヨハン=ホームマン「カムチャツカすなわちエゾ地図」

さきにものべたように、清朝はアイヌを辺民という組織に編入し、毛皮の朝貢を義務づけるとともに、一定の地位とそれに伴う待遇を与えた。この時、朝貢の見返りとして彼らに与えられたもののなかに、蟒袍と呼ばれる清朝の役人の服があった。これが日本で蝦夷錦と呼ばれたのである。1696年に北海道北部の礼文島<sup>れぶん</sup>に漂着した朝鮮王朝の下級武官である李志恒の—

21) 松浦茂、「1727年の北京會議と清朝のサハリン中・南部進出」、松浦茂、『清朝のアムール政策と少数民族』、京都大学学術出版會、2006; 秋月俊幸、『日本北辺の探検と地図の歴史』、北海道大学出版會、1999、pp.82-85。

行は、その後海を渡って北海道の宗谷そうやと思われるところに着いた。李志恒『漂舟録』によれば、宗谷にはしばらく滞在したが、そこで持ってきた服をアイヌの貂の毛皮と交易した。李志恒らが交易した服とは、木綿製であったと推定される。その後彼らは松前藩に保護され、江戸・對馬を経て本国に送還された。松前藩が作成した史料には、李先達(李志恒)の所持品として、「貂皮大小四十枚」とあるほかに、「一 地龍紋茶色」と記されている。宗谷で貂の毛皮のほかに、龍の文様の茶色の布地を手に入れたことがわかる<sup>22)</sup>。これは、1690年代以降に清朝がサハリン島の先住民に下賜した蝦夷錦であるか、サハリン島から北海道の北部の先住民の手元に保管された蝦夷錦である可能性が高い。後にのべるように、明代初期のものと思われる蝦夷錦がサハリン島の北部のニヅフのもとで600年も伝世した例もあり、筆者はあり得ない話してはないと考える。

サハリン島西海岸にナヨロ(現在はペンゼンスコエPenzenskoye)という集落がある。この首長であるヨーチテアイノは、幼い時に人質として清朝の役人に預けられた経歴を持つが、許されて故郷に戻る際、清朝の役人から「楊忠貞」という名を与えられた。彼は、1778年に宗谷で松前藩士に會った際、蝦夷錦を身にまとい、楊忠貞の名を記した書きつけを持っていたという。ヨーチテアイノが生きた時代は、山丹交易が盛んに行われた時代であった。清朝では黒貂の毛皮、日本では蝦夷錦の需要が高かったから、實勢価格をはるかに上回る価格で取り引きされた。そのため、清朝と日本との間で交易に従事していた山丹人などのなかには、大きな富を蓄える者が現れるようになった<sup>23)</sup>。

22) 中村和之、「李志恒『漂舟録』にみえる蝦夷錦について」、『北海道の文化』70、1998。

23) 佐々木史郎、「北方から來た交易民—絹と毛皮とサンタン人」、日本放送出版協會、1996。

## 2) 放射線炭素年代測定法による蝦夷錦の年代測定

II章2節でものべたように、蝦夷錦の信頼できる資料は、市立函館博物館蔵の二着の「山丹服」があげられる程度である。ほかの資料は、來歴が不明であったり、北方交易で日本にもたらされたものであるかどうかははっきりしなかったりする。当然、資料が作られた年代がわかることは、まず考えられない。ところが、青森縣大間町<sup>おおま</sup>の個人蔵の「龍文打敷」が織られた年代を知る手がかりが明らかになった。その資料には、「蘇州織造臣舒文」という文字が織り出されている。台湾中央研究院歴史語言研究所に所蔵される文書によって、舒文が「管理蘇州織造」であったのは、1771年から1777年の間であることがわかった。ただしこれは、特殊な条件の資料にしか採用できない方法である。

これに對して、もうひとつの発見は、名古屋大学宇宙地球環境研究所の小田寛貴氏<sup>おだひろたか</sup>との共同研究により、<sup>14</sup>C年代測定による蝦夷錦の年代が求められたことである<sup>24)</sup>。測定の対象となったのは、ニヴフの帽子である。この帽子は毛皮製で、青地の蝦夷錦が縫いつけられている。1966年にサハリン島北西岸のルポロヴォ(Lupolovo)で採集されたもので、現在はロシア連邦サハリン州のユジノサハリンスク市にある、サハリン州郷土誌博物館に收藏されている。筆者は、



【図9】修理中のニヴフの帽子(外側)サハリン州立郷土誌博物館蔵

24) 小田寛貴・中村和之、「加速器質量分析法による蝦夷錦の放射性炭素年代測定—『北東アジアのシルクロード』の起源を求めて—」、『考古学と自然科学』75、2018。

2006年10月にサハリン州郷土誌博物館を訪問した。たまたまこの帽子の補修の最中だったため、青地の蝦夷錦を外した状態を見ることができた。青地の蝦夷錦の下には、赤地の牡丹文と龍文の蝦夷錦を接ぎ合わせた帽子が出てきた。赤地のほかにはこげ茶や浅黄色の生地もあり、何枚かの蝦夷錦は魚の皮を細く割いたものではぎ合わせてあった。

筆者は、補修の過程で出てきた端切れを7点(青地1点、赤地1点、茶色地2点、こげ茶地2点、黄色地1点)、年代測定の分析資料として提供していただいた。7点のうち6点までの年代は、16世紀から18世紀の間を示している(表1)。清朝がアムール河下流域に勢力を伸ばした



【図10】修理中のニヴフの帽子(内側)サハリン州立郷土誌博物館蔵

時期は17世紀の終わりから19世紀の初めであるから、やや古い年代もあるが、資料の伝世という事情を勘案すれば、絶対にありえない値ではない。

しかし、筆者が表2に示した資料7の $^{14}\text{C}$ 年代は、ほかの資料とは違っていた。 $^{14}\text{C}$ 年代が二行で記してあるが、上段は一標準偏差とよばれ( $1\sigma$ )、この範囲に眞の値が入る確率は約68%である。また下段は二標準偏差といい( $2\sigma$ )、この中に眞の値が入る確率は約95%となる。較正年代とは、自然科学的年代である $^{14}\text{C}$ 年代を、暦年代に換算(これを較正という)した値である。通常の暦年代と區別するために、単位には較正(Calibration)の意を含む[calAD]を用いる。( )の内側に示された値は、最も可能性の高い $^{14}\text{C}$ 年代値を較正した結果であり、( )の外側の数値は較正年代の誤差範囲を示している。表2にある資料7の測定結果を例に、もう少し説明を加えよう。一標準偏差の誤差範囲(539 $\pm$ 24BP、すなわち515~563BPの範囲)を暦年代に較

正すると、1403年から1420年の範囲に相当する。最も可能性の高い<sup>14</sup>C年代値である539BPを較正した結果が、1411年となる。また二標準偏差の誤差範囲(539±49BP)は、1324年から1346年の範囲、および1393年から



【図11】錦の切れ端(左側が資料6、右側が資料7)サハリン州立郷土誌博物館蔵

1432年の範囲に相当し、1411年である可能性が最も高くなる。資料7は右側の黄色の布であり、左側のこげ茶色の布は資料6である。資料7の年代は、元代から明代の初期に当たるもので、これまでの筆者らの調査で得られた数値とはかけ離れている。資料7は、黄色の生地に紫色の糸が織り込まれているが、文様は不明である。<sup>14</sup>C年代測定の結果が信じうるものとするれば、この資料は明初のイシハの遠征によってアムール河下流域・サハリン島にもたらされた可能性が高いといえることができる。ヌルガン都司は15世紀の半ばには機能を停止したと考えられるので、資料7の錦が15世紀後半以降にアムール河下流域に持ち込まれた可能性は低い。したがって、この錦はイシハの遠征によってティル村まで運ばれ、そこで朝貢交易の下賜品として、先住民に与えられたものと考えられるべきである。もしこの仮定が正しいとすれば、この錦は、サハリン島の北部で600年近くも伝世したことになる。

以上のような蝦夷錦の伝世は、中国製品が先住民の社会で威信財としての価値を持っていたことを示すものと考えられる。このような中国製品に対する高い評価が、のちに清朝の進出による山丹交易の隆盛をもたらした、ひとつの要因だったと考えることもできる。

(表 1) サハリン州郷土誌博物館蔵 ニヅフの帽子の「蝦夷錦」こげ茶地(資料6)

	<sup>14</sup> C年代 [BP]	較正年代 [cal AD]
av. ± 1 σ	266 ± 30	1640(1647)1658
av. ± 2 σ	266 ± 61	1523( )1560, 1560( )1572, 1630(1647)1667, 1783( )1796

(表 2) サハリン州郷土誌博物館蔵 ニヅフの帽子の「蝦夷錦」黄色地(資料7)

	<sup>14</sup> C年代 [BP]	較正年代 [cal AD]
av. ± 1 σ	539 ± 24	1403(1411)1420
av. ± 2 σ	539 ± 49	1324( )1346, 1393(1411)1432

## V. おわりに

元朝のサハリン島への進出に始まり、明朝のヌルゲン都司の経営、清朝の辺民支配体制がもたらした蝦夷錦の存在は、アイヌの北方交易との係わりの大きさを示す資料と考えられてきた。

しかしよく考えてみると、ルポロヴォの錦はアイヌではなくニヅフの資料であった。筆者はこれまでの調査でも、蝦夷錦がアイヌの儀礼に用いられたという例を見つけることができていない。唯一、これもアイヌの例ではなく、ニヅフの例であるが、B.ピウスツキ(Bronisław Piotr Piłsudski, 1866-1918)の報告がある。ハンセン氏病の治療の際の事例として、「シャーマンは治療儀礼の間、患者の身内から贈られたシナ服(ギリヤークは宝物としている)を着て治療を行った<sup>25)</sup>と記している。おそらくこの「シナ服」とは、蝦夷錦のこ

<sup>25)</sup> 黒田信一郎、<sup>しんいちろう</sup>「ギリヤークの世界像とハンセン病—資料の提示」、『国立民族学博物館研究報告別冊』5、1987、p.322。

とを示すものであろう。しかしアイヌにおいては、特定の儀礼と蝦夷錦が結びついた例をあげることはできない。筆者が知るかぎりでは、男性の正装の冠(サパンベ)の脇に蝦夷錦(山丹錦)の切れ端を垂らしたものを、「サントサパンベ」と呼ぶ例のみである。

このように、蝦夷錦はアイヌ文化の中に、明確な位置づけを持つことが確認できない。あるいは日本社会との交易価値を持っていたため、アイヌ社会に留まることがなかったからかもしれない。日本人にとって珍重されるものであったとしても、アイヌの人たちにとって、蝦夷錦が本当に価値を有するものであったのかどうかについては、今後慎重に検討しなければならないと考えている。

(2021.04.01. 투고 / 2021.04.11. 심사완료 / 2021.04.19. 게재확정)

[Abstract]

## アイヌの北方交易と蝦夷錦という中国製の絹織物

中村和之

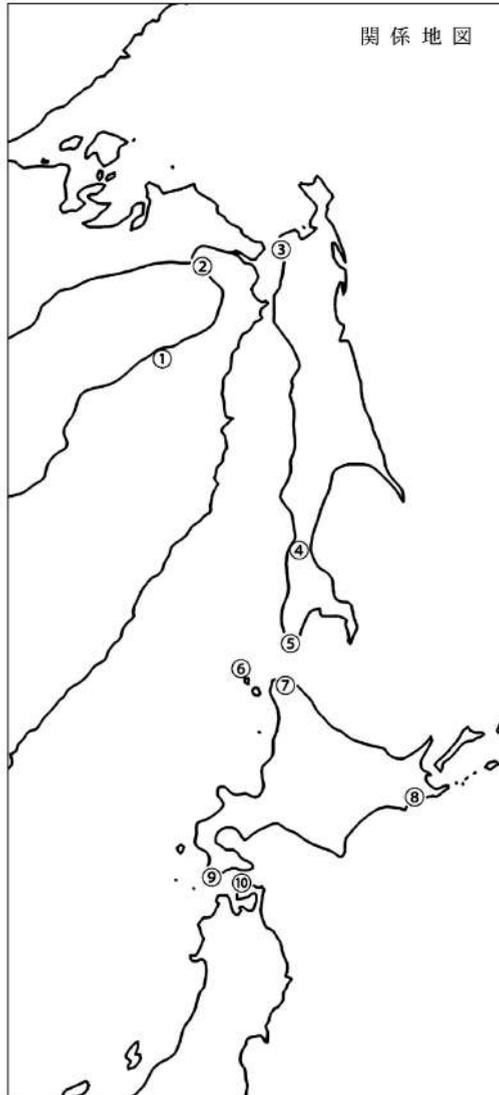
蝦夷錦とは、日本の先住民族であるアイヌの祖先が、北方交易で手に入れた中国製の絹織物の総称である。アイヌの北方交易のルートは、北海道からサハリン島およびアムール河の下流域を經由して、最終的にはマンチュリア（現在の中国東北地方）に至っていた。蝦夷錦とはアイヌの錦という意味で、日本人はアイヌが持つ錦をアイヌの人たちが作ったと誤解していたが、もともとは中国製の錦であった。現在、残っている蝦夷錦の資料には、龍袍・蟒袍などの服の形に縫製されたものと、布地の形のものがある。

中国製の錦が、アムール河下流域にまで運ばれたのは、中国王朝が朝貢交易を行っていたためであった。13世紀後半にこの地域に進出したモンゴル帝国・元朝は、ニヴフ（旧称はギリヤーク）を支配下に組み込み、アイヌとは断続的に戦いを交えた。その一方で、元朝の支配下にいたツングース系の野人とアイヌとは沈黙交易を行っていた。このようにアイヌは、元朝の毛皮交易のネットワークに組み込まれていた。15世紀の初めに、明朝は衛所制をアムール河下流域に展開した。また17世紀後半には、清朝が辺民支配をこの地域に及ぼした。明朝と清朝は、朝貢交易に際して中国製の絹織物を先住民に下賜した。1809年にアムール河畔のデレンに至った間宮林蔵は、清朝の役人と筆談で意思を通じ、朝貢の様子を絵に残している。そこには、辺民たちが黒貂の毛皮を貢納し、錦の布地を下賜される様子が描かれている。この錦が、日本人から蝦夷錦と呼ばれた

ものである。

□ Keyword

蝦夷錦, アイヌ, 北海道, マンチュリア, 北方交易



- ①デレン (Deren)    ②ティル (Tyr)  
③ルポロヴォ (Lupolovo)    ④ナヨロ    ⑤自主  
⑥礼文島    ⑦宗谷    ⑧霧多布    ⑨松前    ⑩大間